

人の行動や発達、それぞれの個人が生まれながらに持っているパーソナリティ（個性・気質等）で決まるのか、それとも、その人が関わる社会との関係で決まるのか？

親の離婚から生じる子どもの発達問題や親の養育者としての問題行動は、子どもや親自身のパーソナリティから引き起こされると言う暗黙の考え方が支配的です。このような考え方が主流となるのは、それぞれの人が置かれた社会的な「役割性」によって評価されているからです。役割性とは、その人が置かれている社会的な立場から、その人の行動や表現が評価され、期待されることです。

“黒人だから”、“離婚した女性だから”、“シングルマザーに育てられた子どもだから”と言った具合に、その人の行動を、その人の立場や役割性で評価する「差別性」が背景に隠されています。特に、親子の場合、親は子どもに親の期待を重ね、時には強要します。教師と生徒も同様に、生徒は教師の期待に応えることを求められています。さらに社会的な地位の立場、職業や肩書き、男と女の立場と言ったように、人と人の関係を無意識に役割性で判断されています。

人が持つ役割性が、いかに強力に影響するかを実験した例があります。

1日15ドルで、アルバイトの学生を雇って、模擬的な監獄生活を再現し、囚人役と看守側に分けられ2週間という約束で実験が始まりました。囚人側は、24時間監視され個人のプライバシーは無視されるが、身体的な害は加えないと言う約束です。看守側には、監獄生活が維持できる程度に役割を果たして欲しいと告げます。

囚人役と看守役は個性的な違いはあるが、極めて平均的な常識のある学生たちでした。

ただ、実験に、より現実性を持たすため、囚人役の学生たちが寮でのんびりしているところに、突然、警察の協力で警官が囚人役を逮捕し、目隠しをして模擬監獄に連れて来ました

この実験の結果は恐ろしい状況になりました。

逮捕された囚人役は、2日も経たないうちに、監獄で暴れはじめ、衣服を破り、暴動を起こしました。それに対して、看守側は、囚人役を苦しめ、心理的に痛めつけ、自尊心を傷つけるような罵声を浴びせました。

看守役は、さらに囚人役を脅し、圧力をかけ、心理的な拘束を行うに連れて、翌日には、囚人役の中から情緒的なパニックや自分の体を痛める行為が起きました。それでも看守役は、囚人役を痛めつけ、罵り、権力を行使する喜びに浸って行ったのです。

実験はあまりにも危険なものだと判断され数日で中止されました。

実験結果の報告はこのように書かれています。

「囚人役は自分らしさを失い、他人のような振る舞いを経験し、抑うつと無力感を経験しています。看守役は、予想以上に囚人役に攻撃的で、人間性を奪うような行動をした。」

囚人役も看守役も、実験を始める前に、彼らの人格や社会性は調べられており、彼らには強い自己否定や攻撃心のない、性格や気質的には、ごく平凡などこにでもいる学生だったのです。